

## 『明狀元図考』訳注(稿) 五

Ming zhuang-yuan tu-kao (5)

鶴 成 久 章

TSURUNARI Hisaki

(国際共生教育講座)

(平成二十四年十月一日受理)

### はじめに

前稿(『明狀元図考』訳注(稿)四、『福岡教育大学紀要』第六十号・第一分冊、二〇一一)までは公文書館(内閣文庫)所蔵の万暦三十五年序刊本を底本に用いたが、これには万暦三十五年科までの状元しか収められていない。そこで、本稿では同じく公文書館(内閣文庫)所蔵の清代の増修本を底本に用いた。この本の巻四は、万暦二十九年の張以誠から崇禎十六年の楊廷鑑までの「狀元図考」を収め、さらに順治三年から康熙四十五年までの清朝の「狀元考」を収めている。

### 巻四

#### 狀元韓敬

萬曆三十八年庚戌 廷試韓敬等三百人、擢韓敬第一。

按、敬公、字求仲、號止脩、浙江歸安人。祖多隱德。父大參冏卿公宰寧德、地產斷腸草<sup>注①</sup>、小民有睚眦、輒自毒。冏卿公命以芟薙、代杖贖。歲餘種遂絕。官三十年、未嘗逮一旄倪及女婦。太夫人性篤孝、事老姑備至、姑疾革時、謂婦事我盡孝、當從冥司乞一狀元兒爲婦報。比公初娠時、太夫人夢日入室、覺而晃然。冏卿公夢日月入懷而產公。蓋日月兩圓、卽兩元之兆。公少穎敏過人、讀書十行俱下。性洒落不事生產、里中或目攝之、不屑也。癸卯冬、過廣德一友人、先日夢張陽和公至、詰朝公款門矣。己酉春、公配沈園中多生並頭花<sup>注②</sup>、忽睹紅綠二蝶、如團扇巨、飛集花間、良久方去。又閣中所存來段產翠條二尺許、人以爲絕異。春雷起自郡城文昌閣中、但聞震聲、不見損壞。無何遊北雍<sup>注③</sup>、舉秋試魁京輔。冏卿公夢一羽衣捧若璽書者來謂曰、而有大德三、姑以此舉償其一。庚歲更償其二、當有加焉。果聯掇大魁不爽。公廷對條答精詳、作字逼真古。晉卷進御、時閣擬第三人、

上拔眞第一。及臚唱、知與會試合、  
上自喜得人云。時年三十一。



万曆三十八年（一六一〇）、殿試に臨んだ士人は韓敬等三百人であり、韓敬を第一位に選んだ。

考えるに、敬公は、字は求仲、号は止脩、浙江歸安の人である。先祖に陰徳が多かった。父の問卿公（名は紹、字は光祖、隆慶五年進士）が寧徳県（福建福州府）の参政であった時、「かの地では」土地の産物の断腸草を、庶民達に諍いが生じる度に「罰として」服用させていた。問卿公は刈り取るよう命じ、代わりに杖刑で罪をあがなわせるようにした。かくて一年余りで「断腸草の」種は絶えた。三十年間官にあって、老人、子供、女性を一人も逮捕したことはなかった。太夫人は大変孝行な性格で、老いた姑に仕えること至れり尽くせりで、姑が危篤になると、「嫁は私に仕えて孝行の限りを尽くしてくれました。冥土の長官から状元の子供を一人もらい受け、嫁に報いなければなりませんね。」と言った。この時公は「太夫人の胎内に」に宿ったばかりで、太夫人は太陽が部屋

に入ってくる夢を見、目を覚ますと「室内が」まばゆかった。「二方」問卿公は太陽と月が懷に入ってくる夢を見ると公が生まれた。つまり太陽と月の二つの円は、「三元と状元の」両元の兆であった。公は若いときから人並みすぐれて聡明で、読書をするとき一度に十行を読んだ。性格は洒脱で生業に就かず、里中「の人」には彼を睨む者もいたが、何とも思わなかった。万曆三十一年（一六〇三）冬、広徳州のある友人を訪ねると、「友人は」先日夢の中で張陽和公（名は元忭、字は子蓋、号は陽和、山陰の人、隆慶五年進士）がやってきて、その翌日公が訪ねてきたということであった。万曆三十七年春、公が沈園の中を散策していると、群生する並頭花「の間」に突然紅と緑の二匹の蝶を見つけた。「その蝶は」うちわのように巨大で花の間に集ってきて、しばらくしてからやっと飛び去った。さらに高殿にしまつてあつた緞子に二尺ほどの緑の枝が生え、人々は実に珍しいと思った。「また、ある時」府城の文昌閣の中から春雷が起こったが、ただ雷鳴が聞こえるだけで、損壊しているところはなかった。間もなくして北京の国子監に学び、順天府郷試で経魁に挙げられた。問卿公は羽衣を着た者が勅書のようなものを捧じてやって来て、「そなたには大徳が三つあるので、ひとまずこれによりそのうちの一つに報いてやろう。庚の年にはさらに「残り」二つに報いることとしよう。」と言う夢を見た。果たして連続して大魁に選ばれ「夢と」違わなかった。公の殿試の対策は精詳であり、文章は古の文体そのものであった。答案が御覧に入れられる段階になって、当時の「読巻官の」閣臣は第三位にしようとしたが、帝が第一位に拔擢された。伝臚唱名の時になつて、会試と同じ「第一位」であることを知ると、帝は人材を得たと喜ばれた。この時、三十一歳であった。

【注】①斷腸草……鉤吻、野葛、苦吻ほかの別名がある。毒草の一種。『本草綱目』卷十七下「草之六」の「鉤吻」の説明には、「廣人謂之胡蔓草、亦曰斷腸草、入人畜腹内、即粘腸上、半日則黑爛、又名爛腸草。」と言う。

②配……「配」の字の解釈がよくわからない。

③並頭花……一本の茎に二輪の花を咲かせると言われる並頭蓮のことか。待考。

④段……未詳。「段」「段」いずれで解してもよくわからない。

⑤北雍……北京の国子監。

【補説】図は、沈園で群生する並頭花の上に紅と緑の大きな蝶を見つけた様子。ところで、韓敬をめぐるのは、湯賓尹（字は嘉賓、号は睡庵・霍林、宣州の人、万曆二十三年進士）による科場案との関係が諸書に記されている。例えば、『明史』卷七十「選舉二」には、「三十八年會試、庶子湯賓尹爲同考官、與各房互換闈卷、共十八人。明年、御史孫居相劾賓尹私韓敬、其互換皆以敬故。時吏部方考察、尚書孫丕揚因置賓尹、敬於察典。敬頗有文名、眾亦惜敬、而以其宣黨、謂其宜斥也。」とある。ちなみに、『万曆三十八年登科録』は、台湾中央研究院傅斯年圖書館に蔵されている。管見による限り、明代の「進士登科録」で現存するのはこの科のものが最後のものである。

### 狀元周延儒

萬曆四十二年癸丑 廷試周延儒等三百五十人、擢周延儒第一。

按、延儒公、字玉繩、號抑齋、直隸宜興人。宜興史孟麟曰、玉繩方舞

象、余與談藝、輒雕龍繡虎。甫齒學、余與談道、又徹形上窺帝先。已而

以性道爲藝、三吳士若紳推爲藝林之冠冕。玉繩之先有靜菴先生者、王文

成高弟、以性道木鐸吾義興。祖太康公、有文先鳴、則性道文學世其家從

來遠矣。其初生隔晚、祖太康公夢家中開大池、池中百鳥會集。門前豎大

牌坊、坊上武魁二大金字。遂乳名武人、曰武者大也、果中大魁。既而父

夢徐文靖公語云、第三令郎宜教之謙抑。如何在余前走。徐中榜眼、在前

即狀元矣。遂定號曰、抑齋。以文靜號謙齋故也。中舉北上、寓浦口陳店

一房。素有邪祟、臥不安寢、聞有聲云、會元狀元在此。不可驚鬧。而父夢臂生兩翼、飛到嵩華絕頂。蓋子中兩元、父即兩元也。未中元時、常夢出遊、前擺瓜槌金燈、遂應公。公臨場夢關帝送賀禮金、曰殿金。蓋古有玉殿傳金榜、君恩賜狀頭之句、應夢、殿金二字、即殿元之乖。張延登曰、余分校禮闈、淇澳孫公知貢舉、將放榜之夕、公坐假寐、忽若有言者、荊川先生在。睨之、見緋耆而幡東立者、荊川也。驚寤而榜適填、第一則周玉繩也。荊川年少以前戊子舉南畿、己丑會元。玉繩亦年少、子丑魁天下、其後身耶。

【校勘】「二」は、「一」の誤り。



万曆四十一年（一六一三）、殿試に臨んだ士人は周延儒等三百五十人であり、周延儒を第一位に選んだ。

考えるに、延儒公は、字は玉繩、号は抑齋、南直隸宜興の人である。宜興の史孟麟（字は際明、号は玉池、万曆十一年進士）はこう言っている、「玉繩が十五歳になった時、ともに文芸について語ると、その度に並外れた詩文の才能を示した。生員になったばかりの時、ともに道について

語ると、また形而上「の学」に透徹して天帝の先をうかがう「ほどの能力を示した」。やがて人性と天道「の学」を文芸と一体化させるに至り、三呉の士人や郷紳は「彼を」学術界を代表する人物だと称えた。玉繩の先祖に静菴先生（名は衝、字は道通、号は静菴、正徳五年挙人）がいた。王文成（王陽明）の高弟で、人性と天道「の学」によって我が宜興を教え導いた。祖父の太康公（名は淳、挙人）は文学の第一人者として鳴らした方であり、人性と天道「の学」、文学は彼の家に受け継がれており、その淵源は古いのである。生まれた日の前の晩、祖父の太康公は「次のような」夢を見たという。家の中に大きな池が開かれて、その中には様々な鳥が集まった。「また」門前には大きな牌坊が立てられ、その上には「武魁」の二字が大きな金文字で記されていた。そこで「祖父は彼の」幼名を武人にし、「武」とは大であるから、状元及第を果たすであろう。」と言った。しばらくすると、父（名は天瑞、字は定順、号は菰樵・警餘）は徐文靖公（名は溥、字は時用、号は謙斎、景泰五年進士）が「第三位の御子息を出しやばらないようにさせるべきだ。どうして私の前を走るのだ。」と語る夢を見た。徐は榜眼で合格しているので、その前にいるのは状元にほかならない。そこで抑斎と号することに決めた。文靜の号が謙斎であったからである。郷試に合格して北に向かう際、入り江の古びた宿屋の一室に泊まった。「そこには」以前から物の怪がいて、横になっても安らかに眠れずにいると、「会元、状元がここにいる。驚かしてはならない。」という声が聞こえた。しかも、父は両腕に翼が生え、嵩山と華山の頂上にまで飛んで行く夢を見た。つまり子が両元になるということは、父も両元にほかならない。まだ状元及第を果たしていない時のこと、外出すると前に瓜槌や金灯「を持った従者」が整列するという夢をいつも見たが、かくてその通りとなった。公は試験に臨む際にも関帝

が祝賀の礼物と金銭を届けてくれ、「殿金だ。」と語る夢を見た。思うに、古に「玉殿で金榜を伝達し、君恩により状元を賜る」という句があり、夢に符合してはいるが、「殿金」の二字は「殿元」の誤りにほかあるまい。張延登（字は済美、号は華東、鄒平の人、万曆二十年進士）がこう言っている、「私が会試で同考試官を務めた時、淇澳孫公（名は慎行、字は聞斯、号は淇澳、武進の人、万曆二十三年進士）が知貢舉で、合格発表を行う前日の夕方、公は坐ったまま仮眠していると、突然「荆川先生（名は順之、字は応徳、号は荆川、武進の人、嘉靖八年進士）がいらいしゃいます。」という声が聞こえた気がした。横目で見ると、緋色の「衣を着た」白髪の老人が東側に立っているのが目に入った。荆川であった。驚いて目を覚ますと、榜にちようど名を書き入れており、会元は周玉繩であった。荆川は以前、若くして戊子の年に応天府郷試に挙げられ、己丑に会元となった。玉繩もまた年少で子（の年に郷試に挙げられ）丑の年に「会元から」状元となったのであるから、その生まれ変わりであろうか。

【注】①史孟麟曰……どこまでが引用か未詳だが、「其初生隔晩」の前までと考えた。②舞象……『礼記』内則篇に、「十有三年、學樂、誦詩、舞勺。成童、舞象、學射御。」とあり、鄭玄の注に、「先學勺、後學象、文武之次也。成童、十五以上。」と言う。③雕龍繡虎……「雕龍」は文章を巧みに飾ること。『史記』孟子荀卿列伝に、「……故齊人頌曰、談天衍、雕龍奭、炙轂過髡。」とあり、「集解」に劉向の『別録』を引用して「騶奭脩衍之文、飾若雕鏤龍文、故曰、雕龍。」と言う。また、「繡虎」は、華麗な詩文を巧みに作ること。『類說』卷四に引く『玉箱雜記』に、「曹植七步成章、號繡虎。」とある。④齒學……語は、『礼記』文王世子篇の「行一物而三善皆得者、唯世子而已、其齒於學之謂也。」に基づくであろうが、具体的に何歳を指すのかは未詳。ここでは、儒学に入學した年として解釈した。⑤帝先……『老子』第四章に、「吾不知誰之子、象帝之先。」とある。⑥三呉……蘇州、常州、湖州一帯の呼称。

⑦ 静菴先生……周衝に関しては、『明儒学案』巻二十五「南中相伝学案」に伝がある。

⑧ 第三令……この部分はよくわからない。

⑨ 中舉……試

験に合格することであるが、単独で使用する場合、郷試合格を指すことが多い。

⑩ 瓜槌金燈……「瓜槌」は瓜の形をした槌。ともに儀仗の類であると思われる。

⑪ 玉殿傳金榜、君恩賜狀頭……『神童詩』に見られる句。

⑫ 分校禮闈……会試で同考試官を務めること。

⑬ 知貢舉……会試の知貢舉は全

二名で、礼部尚書と礼部侍郎が担当した。孫慎行はこの時、礼部侍郎であった。

⑭ 放榜……合格発表のこと。「榜」は合格者名の一覧。

⑮ 子丑……「癸丑」の誤りの可能性もあるが、訳文のように解釈した。

## 狀元錢士升

萬曆四十四年丙辰 廷試汪應元等三百五十人、擢錢士升第一。

按、士升公、字抑之、號御冷、浙江嘉善人。曾祖貞公、奉政大夫、汝寧

府同知、祖吾仁公國子生。父繼科公庠生、授鴻臚、鄉飲大賓。三世好行

陰德、眞積善之家。父先夢宋狀元張九成至其家、而公初生時、背上隱隱

現一元字。自幼穎異、髫年遊泮、試輒冠多士。戊戌以選貢、廷試劉楚先

公奇其才、首拔之。後因久厄公車、旁究堪輿家、自爲其尊公營葬。嘗語

友人曰、此殆可致鼎甲、顧予才德不副耳。至乙卯、舉北闈、所營冢上有

異光、亘照十餘丈、竟月乃已。未第之先、至神農黃帝廟祈夢、夢見神帝

以香鼎與之曰、汝事業在此鼎中。其大夫人與夫人家居、晚間見空中有火

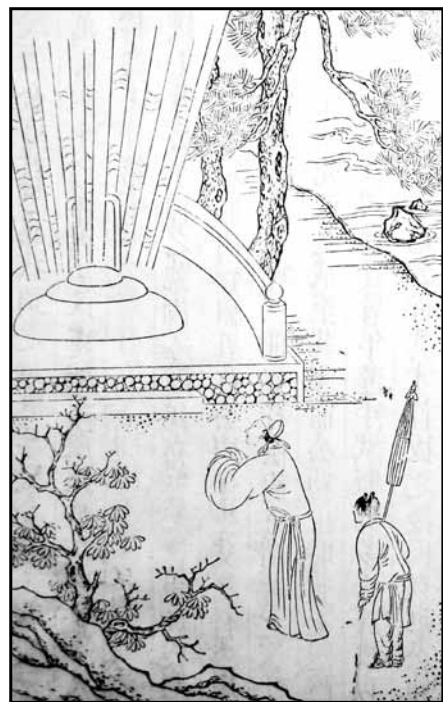
成毬、自上而下、墜天井中、久之方散。人謂祥光煥發調燮、台鼎之兆。

丙辰、適劉公典南宮試。先期夢上以金牌特召之。視其朱書、則昔戊戌所

首拔錢某也。意必中大魁、而榜揭僅首龍腹、深嘆息之。比臚傳、首天

下。始應其夢、并應前二夢云。

生乙亥年己卯月己酉日己巳時。



萬曆四十四年(二六一六)、殿試に臨んだ士人は汪應元(字は尹卿、歙県の人)等三百五十人であり、錢士升を第一位に選んだ。

考えるに、士升公は、字は抑之、号は御冷、浙江嘉善の人である。曾

祖父の貞公(嘉靖十六年卒人)は奉政大夫、汝寧府同知で、祖父の吾仁

公(字は廓如、号は心亭)は監生であった。父繼科公(字は忠所)は生員

であったが、鴻臚寺卿を授けられ、郷飲酒礼の大賓に挙げられた。三世

にわたって立派な行いで陰徳を積んでおり、真に積善の家である。父は

以前、宋の狀元張九成が家を訪れる夢を見ており、公は生まれたばかり

の時、背中の上にうっすらと「元」という文字が現れていたという。

〔公は〕幼い時から聡明で、幼くして生員に挙げられ、〔学校における〕試

験の度毎に多くの学生達の中で首席となった。萬曆二十六年には貢生に

選拔され、〔貢生の選拔試験の〕廷試では劉楚先公(字は衡野、江陵の人、

隆慶五年進士)が彼の才能を高く評価して、第一位に拔擢した。後に長

らく郷試で苦しみながら、かたわらで風水の研究をし、自ら父親の埋葬

を執り行つた。かつて友人に、「ここ（の風水）は鼎甲を招き寄せることがほぼ可能な「ほど優れた」ものであるが、ただ私の才徳がそれにそぐわないだけだ。」と語った。万暦四十三年（一六一五）になって順天府郷試に挙げられると、造営した墓の上を不思議な光が十余丈にわたって照らし続け、まる一月たつてから消えた。まだ合格する前のこと、神農と黄帝の廟に行つて夢のお告げを下さるよう祈っていると、夢に神農と黄帝が現れて彼に香炉を与えると、「そなたの功業はこの鼎の中にある。」と言つた。彼の母上と夫人は家にいて、晩方に空中に火の玉が生じ、上空から降りてきて天井に落ち、しばらくしてから消えるのを目撃した。人々は瑞光が輝いてほどよく調和したのは、三公（になる）兆しだと言つた。万暦四十四年にはたまたま劉公が会試の主考を務められた。期に先立って、皇帝が金牌で「首席を」特別に召し出される夢を見た。その朱書を見ると、かつて戊戌科で首席に抜擢された錢某であつた。きつと高位合格を果たすはずだと思つたが、「会試の」合格者一覽が張り出されると、わずかに中の上あたりであり、深く嘆息した。（ところが）殿試の順位発表の時、天下第一となつた。やつとその夢に符合するとともに、その前の二度の夢にも符合した。

「士升公は」乙亥の年、己卯の月、己酉の日、己巳の時に生まれた。

【注】①郷飲大賓……郷飲酒礼の「賓」に選ばれたことを言う。明代の郷飲酒礼については、例えば、『明史』卷五十六「礼十・嘉礼四・郷飲酒礼」に、「其儀、以府州縣長吏爲主、以郷之致仕官有德行者一人爲賓、擇年高有德者爲僕賓、其次爲介、又其次爲三賓、又其次爲眾賓、教職爲司正。」とある。②宋狀元張

九成……字は子韶、号は横浦居士、錢塘の人、紹興二年（一一三二）の狀元。

③遊泮……生員となること。④選貢……地方儒学から生員を国子監に送る貢生の制度の一つ。定期的に送る歳貢とは別に、学業と徳行の優れた者を

特別に選抜して監生とした。『明史』卷六十九「選舉一・学校」に、「縣學諸生入國學者、乃可得官、不入者不能得也。入國學者、通謂之監生。舉人曰舉監、生員曰貢監、品官子弟曰廩監、捐貲曰例監。同一貢監也、有歲貢、有選貢、有恩貢、有納貢。同一廩監也、有官生、有恩生。」と言う。また、選貢の制度の始まりについては、「弘治中、南京祭酒章懋言、『洪、永間、國子生以數千計、今在監科貢共止六百餘人、歲貢挨次而升、衰遲不振者十常八九。舉人坐監、又每後時。差撥不敷、教養罕效。近年有增貢之舉、而所拔亦挨次之人、資格所拘、英才多滯。乞於常貢外令提學行選貢之法、不分廩膳、增廣生員、通行考選、務求學行兼優、年富力強、累試優等者、乃以充貢。通計天下之廣、約取五六百人。以後三、五年一行、則人才可漸及往年矣。』乃下部議行之。此選貢所由始也。」と言う。⑤公車……舉人が会試に応ずることを言うが、ここでは郷試受験のことを言っていると思われる。⑥鼎甲……殿試の上位三名（狀元、榜眼、探花）のこと。⑦祈夢……神に祈つて夢の中で禍福等の予兆を知らせてもらうこと。⑧台鼎……三公（太師、太傅、太保）のこと。⑨劉古典南宮試……『明貢舉考略』によると、万暦四十四年会試の副主考が劉楚先である。

⑩戊戌所首拔錢某……未詳。⑪龍腹……「龍頭」「龍首」が狀元の意であることから推して、中間くらいの順位のことを指しているであろう。⑫

生乙亥年己卯月己酉日己巳時……万暦三年一月九日。干支に何か意味があるのかも知れない。待考。

【補説】図は、自ら造営した父の墓の上に不思議な光が生じた時の様子。

## 狀元莊際昌

萬暦四十七年己未 廷試莊際昌等三百五十人、擢莊際昌第一。

按、際昌公、原名夢岳、字景悦、號羹若、福建泉州府永春人。生而岐嶷、孩識之無、初操觚時、即能椽筆立就、文不加點。其德量渾如秋月寒江。母嘗夢神龍吐二珠以現第、光耀而復晦、如是者三、吞而孕。公郷試第九、會試殿試俱第一。其廷對因補數字、當路有言、故脩省三年。二

珠、即二元之兆、復晦、即脩省之兆也。

嘗夢身騎兩頭青羊、口誦子在陳曰、忽焉在後二語、莫喻其意。及是科首冠南宮、連擢進士第一、而榜眼爲孔公貞運、探花乃陳公子壯、方悟兩頭羊乃己未年連占兩首、而孔陳在其後也。夢徵之符、何驗如此。



万曆四十七年(一六一九)、殿試に臨んだ士人は莊際昌等三百五十人であり、莊際昌を第一位に選んだ。

考えるに、際昌公は、もとの名は夢岳、字は景悦、号は羹若、福建泉州府永春の人である。生まれながらにして聡明で、字をおぼえ、文章を書き始めたばかりの頃から、優れた文章の才能を発揮し、一気に堂々たる文章を書き上げると添削を加えなかった。その徳のある立派な人格は、あたかも秋の月や冬の川面のように澄み渡っていた。母はかつて次のような夢を見たという。神龍が二つの珠を吐き出しながら邸宅に現れ、「珠は」光り輝くとまた暗くなり、それを三度繰り返してから、「母が珠を」飲み込んで「公を」懐妊した。公は郷試で第九位、会試と殿試はともに第一位であった。廷試で書いた答案に、「登科録」印刷の前に

数字を補ったために、時の執政(楊漣)から批判が出され、それで「休暇を願い出て」三年間修養に務めた。「二珠」は「二元(会元・状元)」の兆にほかならず、「復晦」は「脩省」の兆にほかならなかった。

「公は」かつて頭が二つある青い羊に跨がり、「子在陳曰」「忽焉在後」の二語を口ずさむ夢を見たが、その意味がわからなかった。この科の会試と殿試で続けざまに第一位となり、榜眼は孔貞運公(字は開仲、号は玉横、句容の人)、探花は陳子壯公(字は集玉、号は秋濤、南海の人)という結果になって、はじめて双頭の羊は己未の年に「会試、殿試と」続けて首席になることであり、孔と陳が自分の後になるという意味であったのを悟った。夢のお告げが何とこれほどぴたりと符合したのである。

【注】①岐嶷……『詩経』大雅・生民に「誕實匍匐、克岐克嶷。」とあり、「毛伝」は「岐知意也、嶷識也。」と言ひ、「集伝」は「岐嶷、峻茂之状。」と言う。後の用例では、幼い子供の聡明さを形容する場合が多い。②孩識之無……

子供が初めて字を覚えることを言う。唐の白居易の伝記に由来する語。例えば、『白氏文集』卷二十八「与元九書」に、「僕始生六七月時、乳母抱弄於書屏下、有指無字之字示僕者、僕雖口未能言、心已默識。」とある。③操觚……文章を書くこと。『文選』卷十七に収める陸機の「文賦」に、「或操觚以率爾、或含毫而邈然。」とあり、李善の注に「觚、木之方者、古人用之以書、猶今之簡也。」と言う。

④椽筆……「椽筆」は『晋書』王珣伝に典拠があり、堂々たる文章、すぐれた文章の意。但し、ここでは「援筆」の誤記の可能性もある。

⑤秋月寒江……黄庭堅撰「豫章黄先生文集」卷二「贈別李次翁」に、「利欲薰心、隨人翕張、國好駿馬、盡爲王良、不有德人、俗無津梁、德人天遊、秋月寒江、……」とある。⑥廷對因補數字……恐らくは、『進士登科録』に對策の文章を掲載する前に何らかの補訂を加えたことを言うのであろう。阮葵生撰『茶餘客話』卷二に、「己未殿試、賜一甲進士莊際昌等及第出身。時際昌卷有別字、又洗補未淨。科臣楊漣曰、『以狀元而有別字、必三百人皆不識字乃可。以狀

元而洗補、必三百人皆曳白乃可。」と言うように、彼の書いた対策には誤字があつて修訂を加えたようである。 ⑦脩省……『閩中理学淵源考』卷七十二に収める彼の伝に、「廷對制策、一字偏傍偶誤、被勘、遂乞假歸。」とある。

⑧子在陳曰……『論語』公冶長篇の句。 ⑨忽焉在後……『論語』子罕篇の句。

【補説】図は、母が夢の中で神龍を見た様子。

## 狀元文震孟

天啓二年壬戌 廷試劉必達等四百人、擢文震孟第一。

按、震孟公、字伯起、號湛持、南直隸長洲人。初諱從鼎、後易今名。蚤

負才望、作字甚工、不讓衡山公筆力。聞其居京邸時、嘗夢與文山先生而

語、蓋其系出廬陵。或以天生人龍、亦世德之佑啓耳。文山公當宋運將頽

之時、未竟大用。或于我

明中興之會、呵護後裔、太展徽猷、以致太平之治耶。



天啓二年（一六三二）、殿試に臨んだ士人は劉必達（字は士徵、天門の人）等四百人であり、文震孟を第一位に選んだ。

考えるに、震孟公は、字は伯起、号は湛持、南直隸長洲の人である。初めの名は從鼎であつたが、後に今の名に変えた。つとに才能と人望を有し、文章を書くのが非常に巧みで、衡山公（文徵明）の筆力にもひけをとらなかつた。公が京師の邸宅に居るときに、文山先生と語る夢を見たという話を耳にしたことがあるので、思うに公の家系は廬陵から出ているのであろう。天が傑物を生み出すときには、やはり累世の績徳による助けがあるものである。文山公は宋王朝の命運が傾きかかった時に、「時勢が許さず」重要な任務を全うするには至らなかつた。「かたや」我が明朝の中興の時機に、子孫にご加護があり、最善の道を大いに実践して、太平の政治を実現することになろうとは。

【注】①衡山公……明の文璧、字は徵明のこと。衡山（居士）はその号。②

文山先生……南宋の文天祥、字は宋瑞・履善のこと。文山はその号。③廬

陵……江西吉安府（現在の吉安市）。宋代以来、人文の淵藪として知られる。

④人龍……人の中の龍、すなわち傑出した人物の意で解釈した。⑤明中

興之會……この「中興」は、明朝が国土を完全に支配していない状況のことを

言う。万曆四十四年には既にヌルハチが明朝の領土内に後金国を成立させてい

た。⑥徽猷……最善の道。『詩経』小雅・角弓に、「君子有徽猷、小人與屬。」

とあり、「毛伝」に「徽、美也。」と言ひ、「鄭箋」に「猷、道也。君子有美道以

得聲譽、則小人亦樂與之而自連屬焉。」と言ふ。

【補説】図は、京師の邸宅で文天祥と語る夢の様子。ちなみに、彼が狀元になったのは、十度目の会試にやっと及第した後のことであつた。



### 狀元余煌

天啓五年乙丑 廷試華琪芳等三百人、擢余煌第一。

按、余煌公、字武貞、號<sup>①</sup>□□、浙江會稽人。生而穎異、氣宇不凡。甲子夏夜、凭闌翫池荷、見葉中光輝閃爍、有寸許魁星<sup>②</sup>跳舞其上、毛髮畢具。心奇之、起而祝曰、果屬瑞徵、當現廣長像。俄而漸大、環繞騰空而去。是科遂大魁天下。



天啓五年(一六二五)、殿試に臨んだ士人は華琪芳(字は方候、号は読礼齋・未斎、無錫の人)等三百人であり、余煌を第一位に選んだ。

考えるに、余煌公は、字は武貞、号は公遜、浙江会稽の人である。生まれながらにして並外れて賢く、心がまえも非凡であった。天啓四年の夏の夜、欄干にもたれかかって池の蓮を愛でていると、葉の中がきらきらと輝いており、一寸ほどの魁星が葉の上で踊っていた。(魁星には)毛髪まで完全に具わっていた。心の中で不思議に思いながら、立ち上がり祈って、「もしも吉祥であるのなら、広大な姿を現したまえ。」と言うと、たちまちどんどん大きくなり、周囲をめぐってから空に登っていつ

た。この科でかくて天下第一となった。

【注】①號……「號」のあとは二字分の空格になっている。翁洲老民撰『海東逸史』巻五に記す伝によれば、号は公遜。②魁星……元来は北斗の第一星のこと。後に文運を司る奎星と混同されるようになったという。『日知録』巻三十二「魁」に、「今人所奉魁星、不知始自何年。以奎爲文章之府、故立廟祀之、乃不能像奎、而改奎爲魁。又不能像魁、而取之字形、爲鬼舉足而起其斗。不知奎爲北方玄武七宿之一、魁爲北斗之第一星、所主不同、而二字之音亦異。今以文而祀、乃不於奎而於魁、宜乎、今之應試而獲中者、皆不識字之人與。又今人以榜前五名爲五魁。」とある。ここにいる魁星とは、偶像化された魁星神のことである。

【補説】図は、蓮の葉の中に現れた魁星が天に昇って行く様子。

### 狀元劉若宰

崇禎元年戊辰科 廷試曹<sup>①</sup>勲等三百五十八人、擢劉若宰第一。

按、若宰、字<sup>②</sup>□□、南直懷寧籍、潛山縣人。祖父有世徳。至公臨試、夢天神下、仙樂齊鳴。



崇禎元年（一六二八）、殿試に臨んだ士人は曹勲（字は允大、号は峨雪、嘉善の人）等三百五十八人であり、劉若宰を第一位に選んだ。

考えるに、若宰は、字は穎平、南直隸寧籍で、潜山県の人である。祖父、父と代々徳行を積んでいた。公が試験に臨む際には、天神が降りてきて、仙樂が一斉に鳴り響く夢を見た。

【注】①曹□勲……「曹」と「勲」の間に一字分の空格があるが、この科の全元は曹勲である。

②字……『江南通志』卷百六十四の伝によれば、字は穎平である。

【補説】図は、夢の中で天神が降りてきて、仙樂を演奏する様子。

### 狀元陳于泰

崇禎四年辛未 廷試吳偉業等三百五十人、擢陳于泰第一。

按、于泰公、字大來、直隸宜興人。少時聰敏、個儻不群、常以天下爲己任。<sup>①</sup>及殿試果大魁天下。

崇禎四年（一六三二）、殿試に臨んだ士人は吳偉業（字は駿公、号は梅村、太倉の人）等三百五十人であり、陳于泰を第一位に選んだ。

考えるに、于泰公は、字は大來、南直隸宜興の人である。幼い時から聡明で、衆人から抜きんでおり、常々天下（の経営）を自己の任務だと考えていた。殿試では果たして天下第一となった。

【注】①常以天下爲己任……国家の治乱盛衰を自己の責任と考えること。『三國志』卷二十五「魏書二十五」の楊阜の伝に、「每朝廷會議、阜常侃然以天下爲己

任。」とある。用例は非常に多いが、北宋の范仲淹の伝に見られるのが特に有名。例えば、『宋史』卷三百十四に、「……而仲淹以天下爲己任、裁削倖濫、考覆官吏、日夜謀慮興致太平。」とある。

【補説】この伝のみ図を欠く。

### 狀元劉理順

崇禎七年甲戌 廷試李清等三百人、擢劉理順第一。

按、理順公、字文理、河南杞縣人。爲人渾厚有德、忠孝性成。<sup>①</sup>在郷在官人咸推重。甲申城陷、不欲以死強下人、乃曰、我骨肉至親、自宜全節、汝等可分我所有、各尋活路。衆泣願隨主往。及聞變、公從容酌酒、與妻妾子女奴婢共十八人皆死。後賊至公寓、嘆曰、我素重公。今日來、護持耳。不料已死。皆叩拜而去。無不欽其忠烈。



崇禎七年（一六三四）、殿試に臨んだ士人は李清（字は竹君、金壇の人）等三百人であり、劉理順を第一位に選んだ。

考えるに、理順公は、字は文理、河南杞県の人である。実直な人柄で徳行があり、本性のままに忠孝に励んだ。郷里にいても官界にあつても、人々はみな高く評価して重んじた。崇禎十七年に「李自成によって」北京城が陥落した際には、使用人達に殉死を強いることを欲せず、「私の一族の者達は各自節を全うしなければならぬが、お前達は私の財産を分割して、各々生きる手段をさがすがよい。」と言うと、皆は泣く泣くご主人様について行かせて下さいとお願いした。戦乱「が近くに及ぶの」を聞くと、公は落ち着き払って酒を飲むと、妻妾、子女、奴婢らあわせて全部で十八人とともに命を絶った。後に賊が公の邸宅にやつて来ると、嘆いて、「我々は日頃から公を大切に思っていた。今日やつて来たのはお守りしただけだ。既にお亡くなりになっていたとは思ひもしなかった。」と言うや、みな頭を地に打ち付けて拝礼して去った。その忠烈に敬服しない者はいなかった。

【注】①性成……本性のままに行うこと。『列子』仲尼第四に、「唯黙而得之、而性成之者得之。」とある。②甲申城陷……李自成本の反乱軍が北京を陥れたことを言う。③賊至……張岱撰『石匱書後集』卷二十一「甲申死難列伝」には、「賊至其宅曰、『此吾郷杞縣劉狀元、居郷極好。吾輩奉李將軍令來護衛。劉公何遽死也。』數百人皆下拜、涕泣而去。」とある。

【補説】この図は、正統十三年状元の彭時の伝にあるものと版は異なるが全く同じ図であると言つてよい。本文と図との関係は未詳である。あるいは陳于泰の伝と同様にこの伝にも元々図が無かったのを後で補ったのかもしれない。図には「玉生」の署名がある。ちなみに、劉理順が状元になったのは十一度目の会試でようやく合格した後のことであつた。

## 狀元劉同升

崇禎十年丁丑 廷試吳貞啓等三百人、擢劉同升<sup>①</sup>第一。  
按、同升、號晉卿、江西建昌府吉水縣人。丁酉年<sup>②</sup>四月初五日生。父諱應秋、以解元而擢鼎甲探花、歷任至禮部侍郎。生同升時、夢神人語曰、汝當得貴子。名高二級、兩授修撰。後果中一甲一名、授翰林院編修。及大清定鼎後、降補福建按察司知事、壬午、復授翰林院編修。功名自有定數、信不爽也。



崇禎十年（一六三七）、殿試に臨んだ士人は吳貞啓（字は行若、宜興の人）等三百人であり、劉同升を第一位に選んだ。

考えるに、同升は、号は晋卿、江西建昌府吉水県の人である。万曆二十五年（一五九七）四月五日に生まれた。父の名は応秋（字は上和、号は兌陽）で、「彼は」解元から探花に拔擢され、官は礼部侍郎に至った。同升が生まれた時、神人が夢に現れて、「そなたはきつと高貴な子供を授かるであろう。〔科〕名は〔そなたより〕二級高く、二度修撰を授かるであろう。」と言った。後に果たして一甲一名で合格し、翰林院編修を

授かった。大清が都を定めた後、福建按察司知事に左遷され、崇禎十五年には再び翰林院編修を授かった。功名には自ずと定まった運命があるというのは、まことにその通りである。

【注】①丁酉……諸書の記録によると、状元及第は五十一歳の時のことであることがわかる。したがって、「丁酉」は「丁亥」の誤りであろう。②解元而擢鼎甲探花……父劉応秋は、万暦十年の江西鄉試の解元で、万暦十一年殿試の探花であった。③大清定鼎……以下、事実関係に齟齬がみられるが、原文のまま訳しておく。

【補説】図は、神人が夢に現れた際の様子。

### 状元魏藻德

崇禎十三年庚辰 廷試楊瓊芳等三百人、擢魏藻德第一。

按、藻德、號思令、北直隸順天府通州人。乙巳年五月十六日生。祖諱茂、係武略將軍。遇一神相<sup>注②</sup>驚賞曰、看公尊相、日後必有一好兒孫當大魁天下。及生思令公、果爲状元及第。



崇禎十三年（一六四〇）、殿試に臨んだ士人は楊瓊芳（字は蕊仙、号は斗山、句容の人）等三百人であり、魏藻德を第一位に選んだ。

考えるに、藻德は、号は思令、北直隸順天府通州の人である。万暦三十三年（一六〇二）五月十六日に生まれた。祖父の諱は茂であり、武略將軍であった。「ある時、父が」一人の人相見の達人に会うと、「人相見は」驚き賞賛して、「公の尊いお顔を拝見するに、将来きつと子孫から天下第一になるお方が出るでしょう。」と言った。思令公が生まれると、果たして状元で及第した。

【注】①武略將軍……武官の名称。従五品。②神相……非常に優れた人相見。

【補説】図は、祖父が人相見に見てもらっている様子。

### 状元楊廷鑑

崇禎十六年癸未 廷試陳名夏等三百人、擢楊廷鑑第一。

按、廷鑑、號冰如、南直隸常州府武進人。癸丑年十月二十七日生。父諱啓謨、邑庠生<sup>注①</sup>。爲人端方博學、爲鄉里所推重。於廷鑑對策夜<sup>注②</sup>、夢子同多人赴宴會、到遲、而筵已將散。一人云、來遲、只好飲三杯。後果應改革不顯之兆。



崇禎十六年(一六四三)、殿試に臨んだ士人は陳名夏(字は百史・伯史、号は石雲居・石雲居士、溧陽の人)等三百人であり、楊廷鑑を第一位に選んだ。

考えるに、廷鑑は、号は冰如、南直隸常州府武進の人である。万暦四十一年(一六一三)十月二十七日に生まれた。父の諱は啓謨で、県学の生員であった。品行方正で博学であり、同郷の人々から高く評価されていた。宮廷で「殿試受験者の」対策の審査が行われていた夜、「父は」次のような夢を見たという。子が大勢の人と宴会に赴くものの、遅刻してしまい、宴はすでにお開きになろうとしていた。「すると」ある一人が、「遅れてきた以上、三杯の酒を飲まねばなりませんぞ。」と言った。後に果たしてそのようなかな予兆に応じたのである。

【注】①庠生……生員のこと。

②於廷鑑對策夜……読卷官が殿試の対策を審査した日の夜のことを言っているであろう。『万曆』明会典』卷七十七「礼部三十五・貢舉・科舉・殿試」に、「至日、上御奉天殿、親賜策問、諸舉人策畢、詣東角門納卷、出。受卷官以試卷送彌封官。彌封訖、送掌卷官、轉送東閣

讀卷官處、詳定高下。明日、讀卷官俱詣文華殿讀卷、御筆親定三名次第。賜讀卷官宴。」とあるように、殿試は一日で終わり、即日審査を行ったようである。もっとも、『正徳』明会典』は、「明日」のあとに「今用殿試後二日」と注するので、二日かけて審査することもあったようである。

【補説】図は、父が夢で見たという宴会の様子。

〔附記〕本稿は、平成二十四年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「科挙文献による明代中国の思想史と社会史」(研究代表者…東北大学教授 三浦秀一)による研究成果の一部である。

